

佐藤奈穂著

『カンボジア農村に暮らす  
 妻 婦 たち  
 メマーイ——貧困に陥らない  
 社会の仕組み——』

京都大学学術出版会  
 2017年 v+249 ページ

すぎ やま ゆう こ  
 杉山 祐子

はじめに

開発論でしばしば想定される「女性世帯主世帯は貧困だ」という前提を無批判に受け入れてよいのか、それによって見落としてしまう潜在的な可能性——生きやすい社会としての東南アジア農村の可能性——に、もっと目を向けるべきではないのか。地域研究における民際学を標榜する著者は、カンボジアでの生活実感をふまえて、こんな問いを投げかける。著者によれば、東南アジア諸国におけるセンサスでもカンボジアの社会経済調査でも、女性世帯主世帯が貧困に陥りやすいとはいえないことが読みとれるにもかかわらず、開発論における貧困削減政策の枠組みの中ではそれが看過されてきたという。

その事実と正面から向きあい、丹念な調査と、明確な主張をもって著されたのが本書である。著者は夫をなくした女性たちをいたずらに「社会的弱者」として扱わず、その生計維持と彼女らを包摂する社会生活の実態を淡々と追うことによって、カンボジア農村がもつ「貧困に陥らない仕組み」に接近しようとする。

この課題設定は、ジェンダーと生業に注目してアフリカ農村研究を続けてきた評者にとっても興味深く、強い関心をもって読んだ。第一義的にみた本書の価値は、「アジア型モデル」とでもよぶべきこれまでの農村像を超えて、カンボジア農村における女性と社会の多様なありようへの理解を導く点にあるのだろう。しかし、本書にはアフリカ農村研究と呼応する部分も多く、後述するように、アジアの他地域

やアフリカの地域研究との接点を意識することによって、さらに豊かな展開可能性をもつ知見がちりばめられている。

本書の構成と概要

具体的な論点に入るまえに、まず、本書の構成を示しておこう。本書は以下のように、序と終章を含めた7章で構成されており、3カ所にコラムがはさまこまれている。

序	アジアの豊かさを想う——夫を失くしたカンボジア女性たち「メマーイ」の実態——
第1章	夫を失くした女性たちは貧困か？
コラム	「“かわいそう”の背後に——私の中の〈メマーイ〉①——」
第2章	カンボジアの社会・経済と調査村の概要
第3章	資産所有と相続による資産の獲得
コラム	「幸せな家族像が強いるもの——私の中の〈メマーイ〉②——」
第4章	所得と就業構造
第5章	子どもと老親のケア
コラム	「母を探す旅——私の中の〈メマーイ〉③——」
第6章	メマーイの暮らし
終章	生を支える社会の仕組み おわりに

本書はカンボジア農村に暮らすメマーイ（夫をなくした女性）に焦点を当て、その生計維持の実態を、資産・所得・ケアの3つの視点から検討したものである。序では、著者がメマーイに関心をもった経緯が語られ、本書におけるメマーイの位置づけが明確にされる。続く第1章では、女性の貧困に関わる議論を批判的に検討して「女性世帯主世帯＝貧困」という構図を問いなおし、夫を失った女性たちが貧困に陥らずに生活を維持できる「仕組み」を明らかにするという、本書の目的が示される。ギアーツの「貧困の共有」論、スコットのモラルエコノミー論や互助性に関する議論を参照したのち、カンボジア農村社会の先行研究にあらわれる互助性に言及する。

カンボジア農村社会は個人主義的で互助機能が弱

いという議論と、農村社会の基盤は親族のつながりにあり親族内の相互扶助が広く行われているという、2つの相反する議論があることを紹介したうえで、著者はカンボジア農村社会を「ルースだが貧困が顕在化しない社会」と表現する。一見個人主義的な社会にみえるが、その根底には人と人とのつながりがあり、それが貧困を顕在化させない仕組みに結びついていること、市場経済が浸透した現在もそれが生き続けているという本書の中心的な主張があらかじめ示される。

第2章では調査方法および調査村の概要と、そこにおけるメマーイの状況についての概観が述べられる。本書では、夫をなくした時点で末子が15歳未満の女性をメマーイと定義し、世帯内に1人以上メマーイが含まれる世帯を「メマーイ世帯」として分析対象に据えるが、調査村では全204世帯中51世帯がメマーイ世帯である。内戦とポルポト時代を経た影響がみられるが、メマーイの存在は一過性の現象ではなく、カンボジアの農村社会に存在し続けているという。

次章以降の理解に重要なのは、一夫一婦制で妻方居住が一般的だという婚姻をめぐる慣行である。資産の獲得については、結婚後、妻の両親から土地の一部を相続する慣行があるが、両親と最後まで同居する末娘が家と土地を相続する制度もある。調査村が妻の出身村である世帯は全体の8割近く、村内婚が3割を占めるという村の社会的状況もまた、メマーイの資産状況や資源へのアクセス、ネットワーク形成の基盤である。

第3章では土地制度の変遷をふまえつつ、メマーイの資産所有状況と所得の状況が概観される。生計における農地、屋敷地、家畜の位置づけとその保有状況の検討から、相続における男女の大きな差はなく、夫との離別・死別時にも女性が一定の資産を保有できる社会経済的背景が示される。

第4章では「世帯周期」という概念を用いながら、メマーイ世帯の所得と就業構造が分析される。調査村全戸を対象とした質問票調査による世帯人口や世帯内の有業者数の検討から、メマーイ世帯が労働力不足に陥っているわけではないことが明らかになる。また一口にメマーイ世帯といっても、子どもが小さいメマーイ世帯の生活は苦しいが、子どもが大きくなった世帯ではむしろ一般世帯よりも経済的に楽な

こともあり、夫をなくした年齢とライフステージによって経済状況が大きく異なるという、興味深い発見がある。著者は、メマーイ世帯に家事労働を担う女性成員数が多い傾向にも言及し、メマーイが親やキョウダイと世帯をひとつにする傾向があるという特徴を指摘する。親やキョウダイの支援を受けられるかどうかメマーイの生活状況を大きく左右することが示される。

さらに、夫をなくしたあとのメマーイの生業の変化と就業選択を位置づけるため、村全体の経済構造と生業の概観が述べられる。調査村では農外収入の割合が8割を超えており、所得富裕層は農外収入の多い世帯である傾向があるという。農外就労の職種については、年齢や性別による差があるが、魚の販売や食品の小売りなど、おもに食品を扱う生業で女性に特化した活動があること、近年の経済成長により、農外就労の幅が広がっていることなど、「女性に開かれた経済環境」が明らかにされる。51世帯55人のメマーイ全員について、それぞれの具体的な生業の変化が示された一覧(表4-10, 147ページ)は、丹念な調査を裏づけるものであり、資料としても非常に興味深い。また、生産の側面では世帯が完結した単位となっているが、夫をなくしたあとの生業選択は、メマーイが親やキョウダイと世帯をひとつにする世帯の再編や世帯員の移動によって可能になっていることも示唆される。

第5章では、著者が「再生産」とよぶ、子どもや老親のケアに焦点を当て、世帯員が移動することによってそれが果たされる、農村生活の実態が描かれる。養子や里子などの制度化された移動だけでなく、一時的で便宜的な移動も含め、子どもたちはボン・ブオンとよばれる親族の集まりの中で、世帯間を移動しながら育つという。親族関係の遠近によって責任や義務が異なるボン・ブオンが多層的にケアに関わり、メマーイ自身の年齢や子どもの有無によっても柔軟な世帯の再編がおこる。

前章で述べたように柔軟な生業の選択が可能になるのは、状況に対応して行われる世帯メンバーの移動や共同によることが実証的なデータによって明らかにされる。老親のケアについても同様の傾向が確認されており、ここにいたって、夫をなくしても極端な貧困に陥らない仕組みの基盤に、こうした柔軟な人の移動とボン・ブオンを単位とした相互扶

助があることが浮かびあがる。

これらをふまえて、第6章ではさらに個別事例をとりあげ、資産・所得・ケアが具体的にどのように関わりあいながらメマーイの暮らしにあらわれているのかが描かれる。さらに3名のメマーイのライフヒストリーを用いて、夫をなくすというリスクに直面したメマーイたちがどのように新たな立ち位置を構築し、社会に包摂されながら、生計を維持してきたのかを描く。メマーイの女性としての人生という視点から「貧困に陥らない仕組み」の具体像が示される。

終章では、所得貧困とリスクに対する脆弱性という観点からこれまでの記述を総括し、メマーイが「貧困に陥らない」社会的な仕組みを解きあかす。夫との死別・離別に際しても一定の資産が獲得できる状況をうしろだてに、「女性に開かれた経済環境」が夫をなくしたあとの生業選択の幅を確保している。重要なのは、世帯間での人の移動や世帯の再編といった、外からはみえにくいポーン・ブオン内の相互扶助関係が人びとの生活を根底で支えているという発見である。この発見を通じて著者は、固定的な世帯を経済単位とする分析では、本書でみたようなケアの共有・共同といった「生の安全保障」の基盤やその持続性を読みとることができなとし、「世帯」という単位を見直す必要も強調する。

著者は「個人主義」と評されてきた家族の義務や集団への帰属の曖昧さが逆に、状況対応的な世帯の再編や土地の共用などの柔軟な対応を可能にし、リスクを顕在化させない仕組みの根幹にあると結論づける。そしてこのような特徴をもつカンボジア農村を「柔構性」ということばで表現し、第1章で述べた「ルースだが貧困が顕在化しない社会」という表現を「ルースだから貧困が顕在化しない社会」と言い直して、その柔構性をもつ可能性をあらためて評価する。こうした手続きを経て、女性世帯主世帯は貧困だという前提がカンボジア農村にはあてはまらないことが示され、日本との対比を用いながらメマーイたちの「豊かさ」が主張される。

本書の特徴として指摘しておきたいこと

以上、少し詳しく本書の内容を紹介してきたが、本書には著者のみずみずしい情熱があふれており、

詳細で具体的なデータにもとづいた分析をたまたみかけるように展開する第4、5章は読みごたえがある。

本書の分析枠組みで著者が成功しているのは、夫をなくすというできごとをリスクと位置づけ、メマーイの生計において、そのリスクがどのように回避されるのかを焦点化して実証的に検討を進めた点であり、メマーイを含むカンボジア農村の人びとのライフコース全体を見通しながら生存の安定を考えようとしたことにあった。それによって、平常時には「個人主義的」で相互扶助がほとんどみられない農村生活においても、ひとたび生計にとってクリティカルな状況が生じると、ポーン・ブオンを単位としたセーフティネットが顕在化することが示された。このときリスク回避に重要な鍵として機能するのは、子や老親の世帯間移動や、メマーイと親キョウダイとの世帯の合一化などといった世帯単位の再編だが、経済学で「影の部分」とされてきた再生産領域、とくにケアに関わる部分が世帯の再編の核になっていることが重要な発見だといえる。

さらに、ケアの文脈においては生計維持にクリティカルな状況だけでなく、世帯間の人の移動や土地の共有・共同といった活動が、むしろ日常的に生じており、それを促しているのが個人の所属を固定化しない「個人主義的」な世帯や集団のありようだということが興味深い。ここで著者がいう「個人主義的な」世帯や集団のありようとは、世帯や集団とそこに属する個人の関係に固定化された規範がなく、個人が状況対応的に世帯内の役割を変化させたり、世帯間を移動したりすることによって、世帯や集団が柔軟に組み替えられるさまを指している。この発見にいたったことによって、先行研究の中で相反するかにみえていた2つの議論を統合的に理解する道筋ができたことを高く評価したい。生産の単位と再生産の単位がかならずしも一致しないというこの知見は、カンボジア農村における「個人主義」と共同・協調が併存しうることを示し、いままでとは異なるモデルでの相互扶助関係を構想することにもつながるだろう。

もうひとつ、本書について特記しておきたいのは、章の間にはさまれたコラムの効果である。学術書にコラムをはさむのは京都大学学術出版会の手法が光るところだが〔鈴木・高瀬2015〕、本書の特徴は、両親の離婚と再婚を経験してきた著者の「自分語り」

が要所所に組み込まれている点にある。

フィールドワーカーがフィールドで抱く興味関心は、多かれ少なかれ、そのひとの属性によって置かれた立場や、その人生の過ぎこしかたと無縁ではない。それゆえ、民族誌的記述を読むとき、このような背景の記載が深い理解を助けることもままあるだろう。1980年代のニューエスノグラフィー以降、民族誌的記述の方法論としてのこうした試みはいくどかされてきたが、日本の民族誌にはあまり多くないように思う<sup>(注1)</sup>。本書ではコラムにおける著者の自分語りを通して「家族はこうあらねばならない」という近代家族イメージに縛られ、それゆえに「生きにくく」なっている日本との対比を明瞭に映し出すことによって、「柔構造のカンボジア農村社会」という本論の主張に背景的説得力をもたせることをねらったものだといえよう。

#### さらなる展開にむけて

評者自身の研究内容と関連して非常に興味深いがゆえ、考えさせられたのは、本書に描かれた村の状況をカンボジア農村に共通する独特な特徴だと解釈できるのか、またそうするだけでよいのかという点である。本書の知見は他地域の研究成果とのすり合わせを視野に入れるとさらに広い展開可能性をもっているように思う。

まず、「女性世帯主世帯は貧困である」という前提の見直しという点について、ほかのアジア地域まで視野を広げると、たとえば岩間 [2013] は、ネパール農村での調査にもとづいて、女性世帯主世帯が親族ネットワークの支えを活用しながら自立的に生計を営み、貧困とはいえないことを報告している。八木 [2007] は、インドを含む南アジア地域におけるジェンダー関連論文のレビューを総括し、それまでの一般的な傾向として女性世帯主世帯の貧困に言及する研究が多いことを指摘したが、近年では岩間のように、寡婦-女性世帯がかならずしも貧困に陥るわけではなく、多様な生活形態がみられるという報告が散見される。

女性世帯主世帯の生計維持というテーマでアフリカ地域の農村にまで目を向けると、古くは拙稿 [杉山 1996] で扱ったザンビア農村の女性世帯も、世帯の再編や母娘を中心とする世帯間の共同といった柔

軟な対応によって「離婚したって大丈夫」な状況を生みだしていた。このような視点からは、本書で示されたカンボジア農村の事例もアジア地域における寡婦-女性世帯の多様な位置づけを示す一例として見直すこともできる。

カンボジアは他のアジア地域に比べて、自営農が多く農民の土地保有状況などに大きな格差が生まれにくい地域だったと聞く。共通するテーマを扱う他地域の研究を視野に入れ、地域の特性を織り込みつつ、資産の保有や現金の流れ、資源へのアクセス状況を検討していくことによって、生計とジェンダーについての議論枠組みを鍛えることもできるだろう。また、最後に著者も言及しているように、農村の人びとのライフコースを都市との関係の中に位置づける視点から、この「仕組み」を深く検討することも有効な手段だろう。

さらに、著者が指摘する「世帯」単位の分析の限界やケアを担う社会的な範囲の設定に関しては、中谷 [2005; 2007] が再三指摘しているし、世帯員の移動を常とする世帯の柔軟な再編に注目することの重要さは、拙稿 [杉山 2007] でも強調した点である。アフリカ地域に目を向けると、子どもが他世帯に寄食することや他地域の親族や友人を訪問して長期滞在するといったことは、むしろ日常的な光景として報告されているが、土地などの資産と世帯が密接に結びつき、世帯メンバーが固定的だというイメージが強い東南アジア農村で、本書のような発見があるのは非常に興味深いところだ。移動農耕を基本に生計を営んできたアフリカ農村の世帯の再編と、本書のように水田による定着農耕を営む東南アジア農村の世帯の再編には、どのような差異や共通性が見出せるだろうか。

資産や経済活動、そこにおける親族関係の現代的な意味合いを考えると、著者のように具体的で詳細な資料にもとづいて生計の全体像を捉え、人びとの生活の実態に迫る地道なアプローチが不可欠である。近年のアフリカ農村研究では、生計アプローチ (livelihood approach) の枠組みから、家計分析を通してケニア農民の生計戦略に迫り、そこにおける親族関係の現代的な重要性を論じた伊藤 [2013] の優れた論考などがある。これらの成果を視野に入れると、本書の知見は単にカンボジア農村に特徴的な仕組みについての議論にとどまらず、現状において直面す

るさまざまなリスクを読み込みながら農民が生計を維持する仕組みに、親族関係や既存の慣行がどのように機能し、新たな様相を生みだしているかを検討する素材を提供してくれる。

### 「女性に開かれた経済環境」について

本書の構成上、枠組みの中に組み込むのは難しいと承知のうえでいうのだが、著者がいうところの「女性に開かれた経済環境」（表4-10、147ページ）についても、さらに深い検討が加えられそうだ。

「女性に開かれた経済環境」下でメマイーが選択する生業の変化は実に多様で、本書中に掲げられた表4-10「メマイーの生業変化」からは、夫との離死別後、未成年の子どもをかかえて母子世帯になったメマイーが、それまでの「主婦」から米や鶏の「小売り」や「雑貨店」を営むようになったり、「高利貸」になったりする（！）変化が記されていて興味が尽きない。著者も指摘するとおり、この自在にみえる選択の背後には、食品を扱う生業を中心に小規模な商売が女性に特化した活動として社会的に認められていることや、農外就労の機会が拡大していることが重要だろう。このように、大きな投資なしに一定の収入が得られる経済活動へのアクセスが確保されている状況が、一見自在な生業の選択を支えている。

この状況は、調査村に暮らす女性たちが生活の中で多層的な社会関係を構築し、結婚後も、夫との離死別後もその社会関係を保持し続けることができる妻方居住の傾向が強いことと不可分である。さらに、菓子作りの方法などを「自然に」習得するには、菓子作りをする女性が周囲に複数いて、その作業を頻繁に目にしたり、ちょっとした手伝いをする経験ができる環境があるだろう。また、夫をなくした他の女性が生業を変えながら、生計を維持するさまをつぶさにみてきたことによって、自分自身が夫をなくすという状況に直面したとき、先達のメマイーたちがロールモデルとしてあらわれることにもなるだろう。

ここでは、女性たちがその能力と社会的資源を十分に活用できる環境がたくましく生みだされていることに注目したい。アフリカ農村における在来の技法の習得や在来のイノベーション過程と生業の変化について検討してきた評者の関心にひきつけてい

くと、このような構造を再生産しつづけることが、本書でいう「貧困に陥らない仕組み」を下支える特徴であり、さらに深い議論の入り口にすべきであるようにみえる。

カンボジア農村の「豊かさ」を強く印象づけるためだろう、著者はかなり紋切り型に日本の寡婦の不遇を描いて異質さを強調したが、「女性に開かれた経済環境」に関する限り、地方に暮らす日本の女性たちとの共通性に目を向けてもよいだろう。日本でも、海女や行商、市、農産物直売所など、地方の農山漁村の暮らしの中には、紋切り型の近代家族像にとられずに、女性に開かれた／女性が開いてきた経済環境がある。そこにみられる経済活動と相互扶助ネットワーク、そこで実践される実に多様な企てを通して、人びとは暮らしの可能性を広げながら生きぬいている〔山本 2008; 2017〕。

そこに共通する要素として、小規模な商売や現金獲得活動が重要な役割を果たしていることに注目しておきたい。アフリカ地域にも同様の傾向がある。同じように小規模な商売でも、その方向性や基本的ななりたちはジェンダーによって異なる傾向を示す。生計全体の安定をめざす小規模な商売の位置づけと、収入と規模の拡大を志向する商売とでは、その質は大きく異なる。現金や資源を繰り返す決定権をだれがもつのか、実際にはどのように現金や資源が動き、どのように決定権のありかが変化するのかなどの具体的な検討を進めることによって、生計活動のみならず、地域経済と小規模な商業に着目したジェンダー研究の可能性についても議論を深める必要があるのだろうという思いをいだいた。

### おわりに

本書の知見に触発されて、著者には無理難題にみえるかもしれない、いくつかの論点に言及してきた。このように考えてみると、これまで評者自身が「アジア」や「アフリカ」といった「地域」の枠にとどまって自身の研究を進めてきたことに思いいたる。本書で著者が描いたカンボジア農村の姿を自分自身の課題と結びつけて考えるなら、マクロには女性が相対的に不利な状況におかれる構造がある一方、生活レベルでミクロにみるとあらわれる相互扶助や潜在力をどのような文脈で評価し、これらのフィール

ドから積み上げられた知見を、どのように公的な制度や政策にくみ上げるかという視点も必要だといえる。

これまでの農村女性の生計に関する論考では、彼女らが変動する国家経済の中で「生きぬく」ことや「貧困に陥らない」ことに焦点が絞られがちで、女性たちの経済活動が上昇転化に結びつく道筋の検討が手薄である。土地などの資産の権利が保持されるからといって、かならずしも女性のエンパワーメントにつながるわけではないという視点から、タンザニア農村女性の生活を総合的に検討した田中 [2016] が、実践にむけた提言や今後の課題を示しているように、どのような道筋で、大きな構造変革につなげるかを構想する必要もあるのだとあらためて感じさせられた。

本書は、緻密なデータ提示によってこれらの論点を浮き彫りにし、他のアジア地域やアジアとアフリカ地域研究の相互参照と比較を通じた地域間研究 [高谷 1999] の必要を読者に思い起こさせる点でも、刺激的な著作だといえる。

(注1) 松園 [2003]、小馬 [2002] などでは意識的にこのような背景記述が使われている。

### 文献リスト

伊藤紀子 2013. 「ケニア農村世帯の生計戦略と親族関係——西部州ブニャラ県における家計調査データ分析を通じて——」『アフリカ研究』(82) 1-14.  
 岩間春芽 2013. 「ネパール北西部農村におけるチェトリの女性世帯主世帯の生計活動——女性の労働力、土地、相互扶助ネットワークに着目して——」『現代インド研究』3 191-207.  
 ギアーツ、クリフォード 2001. 『インボリューション——

内に向かう発展——』池本幸生訳 NTT 出版.  
 小馬徹編 2002. 『カネと人生』雄山閣.  
 杉山祐子 1996. 「離婚したって大丈夫——ファーム化の進展による生活の変化とベンバ女性の現在——」和田正平編『アフリカ女性の民族誌』明石書店.  
 ——2007. 「アフリカ地域研究における生業とジェンダー——中南部アフリカを中心に——」宇田川妙子・中谷文美編『ジェンダー人類学を読む』世界思想社.  
 鈴木哲也・高瀬桃子 2015. 『學術書を書く』京都大学学術出版会.  
 高谷好一編 1999. 『〈地域間研究〉の試み(下)——世界中で地域をとらえる——』京都大学学術出版会.  
 田中由美子 2016. 「『近代化』は女性の地位をどう変えたか——タンザニア農村の土地権とジェンダーをめぐる変遷——」新評論.  
 中谷文美 2005. 「育てる——社会の中の子育て——」田中雅一・中谷文美編『ジェンダーで学ぶ文化人類学』世界思想社.  
 ——2007. 「国家が規定するジェンダー役割とローカルな実践——インドネシア——」宇田川妙子・中谷文美編『ジェンダー人類学を読む』世界思想社.  
 中谷文美・宇田川妙子 2007. 「終章」宇田川妙子・中谷文美編『ジェンダー人類学を読む』世界思想社.  
 松園万亀雄編 2003. 『性の文脈』雄山閣.  
 八木祐子 2007. 「女性・身体・暴力——インド——」宇田川妙子・中谷文美編『ジェンダー人類学を読む』世界思想社.  
 山本志乃 2008. 「市と行商」川森博司・山本志乃・島村恭則編『日本の民俗3 物と人の交流』吉川弘文館.  
 ——2017. 『行商列車——〈カンカン部隊〉を追いかけて——』創元社.

(弘前大学人文社会科学部教授)